

青函圏交流・連携ビジョン

～ 交流・連携の新たなステージへ ～

青函圏交流・連携推進会議

平成23年7月

青函圏交流・連携推進会議シンボルマーク 

目 次

I	ビジョン策定の趣旨	1
---	-----------	---

II	めざすべき方向	2
----	---------	---

III	当面の重点分野	2
-----	---------	---

I ビジョン策定の趣旨

1 ビジョン策定に当たって

(1) これまでの経過

北海道の道南地域（渡島・檜山地域）と青森県からなる「青函圏」は、太平洋と日本海をつなぐ津軽海峡をはさんで、縄文時代からヒトやモノの交流が行われてきました。

この「青函圏」は、各地に多様な自然景観、伝統的な祭りや郷土芸能、歴史的な遺産、豊かな農林水産物など様々な地域資源を有する上に、全国的な知名度・ブランド力のある「津軽海峡」や「青函トンネル」という資源を共有しています。

津軽海峡は北海道と本州をつなぐ交通の要衝でもあり、明治41（1908）年の青函連絡船就航、昭和63（1988）年3月の青函トンネル開通を経て、平成22年（2010）12月4日には新青森までの東北新幹線が全線開業し、また、平成27（2015）年度には北海道新幹線新青森・新函館（仮称）の開業が予定されています。

青函圏では、これまで、「青函インターブロック交流圏計画（平成元年策定）」「青函圏交流・連携プラン（平成13年策定）」を指針としながら、行政、地域住民、各種団体、企業などにより、様々な交流事業が展開されてきました。

(2) 社会経済情勢等の大きな変化

全国的な問題として、今後、急速な高齢化の進展と本格的な人口減少社会の到来が予想されており、青函圏においても地域活力の低下が懸念されています。また、グローバル化の進展、情報通信技術の発達など、社会経済情勢は激しく変化を続けています。

また、安全・安心、地球環境、美しさや文化に対する意識の高まり、ライフスタイルの多様化など、価値観の変化・多様化が進んでいるとともに、これらのニーズに応えるため、幅広い「公」の役割を果たすNPOを含めた各種団体などが担う役割が大きくなってきています。

(3) ビジョン作成の必要性

これらの社会経済情勢等の大きな変化を踏まえ、青函圏が一体となった経済文化圏の形成をめざすための指針として、交流・連携の新たなステージへ向かうための進むべき方向性を示したビジョンが必要となります。

2 ビジョン推進のために

(1) ビジョンの対象範囲は

このビジョンは「青函圏」を対象としていますが、「青函圏」とは、北海道の道南地域（渡島・檜山地域）及び青森県の圏域を指します。

ただし、交流分野によっては、これまでの歴史的、社会的、経済的な経緯を踏まえて、北海道の道央地域や北東北などの広い圏域も含めるものとします。

(2) ビジョンの期間は

このビジョンは、平成23（2011）年度を初年度とし、概ね10年後の平成32（2020）年度を目標年次とします。

(3) ビジョンを推進するのは

このビジョンは、青函圏の住民、NPOを含めた各種団体、企業、行政等の多様な主体が協力・連携して交流・連携を進めていきます。

II めざすべき方向

1 基本コンセプト

新幹線の開業などの青函圏を取り巻く環境変化等を見通しながら、圏域の様々な交流・連携の主体が自然や特色ある伝統文化などの地域の資源を積極的に保全・活用しながら、交流・連携による取組を一層推進します。

また、民間の自主性・自立性を高めながら地域づくりに活かしていきます。さらに、青函圏の魅力を発信し、圏域外との交流・連携も進めていきます。

2 めざす姿

(1) 地域の強みを活かした活力ある青函圏の形成

青函圏には、白神山地、十和田湖、大沼・駒ヶ岳などの自然景観をはじめ三内丸山遺跡、大船遺跡などの縄文遺跡やねぶた・ねぷた、えんぶりや江差姥神大神宮渡御祭などの古い歴史を持つ祭り、津軽三味線や江差追分といった郷土芸能などの歴史的な遺産といった「観光」資源や、津軽海峡・日本海・太平洋の水産物や地域の特性を活かした多種多様な農畜産物といった「食」資源が数多くあり、これら地域の強みを活かした取組を進め活力ある青函圏の形成をめざします。

(2) 地域の特性を活かした豊かな青函圏の形成

私たちの先人が育んできた伝統文化や郷土芸能等の地域の特性を生かしながら、教育・スポーツ・文化等各分野での交流の促進を図り、未来の青函圏を担う人づくりを進めます。また、学術・研究等の交流・連携による多分野での成果を情報発信するとともに、圏域の秀でた特性などをお互いに学び合い、それぞれが切磋琢磨しながら個性豊かな青函圏の形成をめざします。

III 当面の重点分野

1 「食」を通じた青函圏の魅力づくり

(1) 青函圏の素材を活かしたブランド化の取組

青函圏には、米、りんご、カキ、ホタテ、イカなど豊富な農水産物があり、これらを活かした青函圏の「食」のブランド化をはじめ、農業、水産業と食品加工業と連携した加工品の開発など、ブランド力向上の取組を進めます。

(2) 圏域が一体となった販路拡大の取組

大間や戸井・松前など津軽海峡のマグロ、函館・八戸・鱒ヶ沢のイカ、陸奥湾や噴火湾のホタテなど、青函圏には共通して有する資源が多くあります。こういった資源は、互いに競争しながらも、安定的な需要を確保するため、協力・連携したPR活動などにより販路拡大の取組を進めます。

2 「観光」を通じた青函圏の魅力づくり

(1) 新幹線や多様な交通手段を活かした広域観光の取組

青函圏では、新幹線のみならず、航空路線についても、青森空港や函館空港には東京・中部・ソウル等からの直行便が就航しており、三沢空港・奥尻空港も含め、さまざまな路線が就航しています。

航路においても、青函を結ぶフェリー航路（函館－青森、函館－大間）のほか、檜山と奥尻島、青森・津軽半島と下北半島を結ぶ航路も運航しています。

青函トンネルも含め、立体的な交通体系を活用することにより、多様なルートを設定しながら、青函圏が一体となった広域観光の取組を進めます。

(2) 「食」「文化」「歴史」を活かした観光の取組

青函圏には、白神山地、十和田湖、大沼・駒ヶ岳などの自然景観をはじめ、三内丸山遺跡、国宝「中空土偶（大船遺跡）」「合掌土偶（是川遺跡）」など青函圏に点在する縄文遺跡群、「ねぶた」「ねぷた」、「えんぶり」、「江差姥神大神宮渡御祭」などの長い歴史を持つ祭り、津軽三味線や江差追分といった郷土芸能などの歴史的な遺産といった様々な観光資源を有しています。

その中でも、北海道・北東北が世界遺産の登録に向けて取り組んでいる縄文遺跡群など、青函圏が共通して有する資源を活かした観光の取組を進めます。